

研究論文

「性的な存在」の関係論的形成

——恋愛／性愛における違和の経験に着目して

佐川魅恵

1 はじめに

本稿の目的は、恋愛／性愛を契機とする性別違和の経験が、ジェンダー、セクシュアリティ、身体関係をどのように作り上げ、変化させていくのかを、「女」／「男」という性別二元論に当てはまらない性を生きる4名の恋愛／性愛の語りから経験的に析出していくことである。

「ジェンダー」と「セクシュアリティ」という概念やその関係をめぐっては、社会運動や当事者の立場と理論的研究の両面から、その複雑さが議論されてきた (Valentin, 2007; Rubin, 1984/1997; Sedgwick 1990/2018; Butler 1994/2020)。一方でゲイ／レズビアン運動においては、自らがどのような性別に属するのかという性自認 (gender identity) と恋愛感情を向けたり性的欲求を抱いたりする性的指向 (sexual orientation) は明確に区別されるべきである (「ゲイ男性は単に男性を愛する男性である」等) ことが主張されてきた (Valentin, 2007, pp. 53-54)。他方で学術的にも、「セクシュアリティ」と「ジェンダー」は「社会的実践に関してはふたつの異なった領域の基礎を形成している」のであり、分析概念として分離して捉えるべきとされる (Rubin, 1984/1997, pp. 133)。

しかしこうした議論では、ジェンダーとセクシュアリティを概念上別個のものとしてみなしつつも、一方が他方との関係で表現されるという点で両者は時に不可分なものとしても理解される必要があることも同時に強調されている (Sedgwick, 1990/2018, pp. 45; Butler, 1993/2021, pp. 326)。それゆえより経験的な社会学的研究では、ジェンダーがセクシュアリティを通じて、あるいはセクシュアリティがジェンダーを通じてどのように機能し、両者がいかにしてアイデンティティや他者との関係を形成しているのかを探求している。

特にトランスジェンダー研究においては、こうしたジェンダーとセクシュアリ

ティの区別がトランスジェンダーの間でしばしば曖昧になる傾向にあることが指摘されている (Bettcher, 2014)。それゆえ両者の相互作用を理解する上では、身体化 (embodiment) の様相が重要であるという (Cuthbert, 2019, pp. 843-844)。例えばトランスジェンダーの中には、あるジェンダー化された身体性の維持や変化が、性的指向やセクシュアリティをめぐる自己を規定したり揺るがしたりすることがある (Schilt & Windsor, 2014; Doorduyn & van Berlo, 2014)。こうしたトランスジェンダーの身体性は、特にその性別違和に関して、「その人自身がどのように自らの身体を感じているか」という一人称的な「身体イメージ」の問題として理解される必要があるだろう (藤高, 2020)。

特に恋愛／性愛の場面では、こうしたジェンダー、セクシュアリティ、身体の複雑な絡まり合いは自己と特別な他者の関係性をめぐって形成されていく。トランスジェンダーの性別違和がときに自身の身体イメージをめぐってもたらされ、さらにそれが恋愛／性愛を契機とする場合、ジェンダーとセクシュアリティの絡まり合いは「特別な他者の身体をどのようなものとして私を感じるか (感じることを望むか)」「私の身体を特別な他者はどのように感じるか (感じることを望むか)」といった他者との関係を通じた身体イメージをも織り込んだものとなる。

本稿はこうしたトランスジェンダーの多層的な性の経験をめぐる諸研究を踏まえた上で、出生時に割り当てられたジェンダーとは異なるジェンダーを生きる者のうち、特に二元的でない性自認を有するXジェンダー¹の語りに着目する。これらの恋愛／性愛を契機とした違和の発現と、その後の性に対する認識や感覚の変化に着目することで、性別二元制を基盤としたジェンダー、セクシュアリティ、身体の構造的連関を明らかにし、二元制に回収されないそれらの多様な結びつきの実践を描き出す²。

¹ Xジェンダーとは、「女」／「男」という性別二元論に当てはまらない性自認を指す言葉として、1990年代後半から関西のクィア・コミュニティで用いられるようになったのが始まりだと言われている (Dale 2013)。この言葉で表現される当事者の性の感覚はさまざまであり、「中性」、「両性」、「不定性」、「無性」などの下位分類で表されることもある。

² Xジェンダーの恋愛／性愛や、そこにおけるジェンダーとセクシュアリティの多層的な結びつきについては、Dale (2013) や武内 (2021) でも考察されており、本稿にとっても重要な先行研究である。本稿ではこれらの研究を引き継ぎつつ、恋愛／性愛におけ

2 調査と方法

本稿で使用するデータは、2016年6月～2017年7月に21名のXジェンダーを自認する者への半構造化インタビューから得られたものの一部である。詳細は表に示した。性別違和を感じ始めたきっかけに恋愛や性愛における出来事を挙げていた4名の語りを対象に分析を行った。Tさん以外の3名には2021～2022年にかけて当時のスクリプトを参照しながら再度インタビューを行っている。基本的には1回目のインタビューデータを分析対象としているが、必要に応じて2回目のインタビューデータも部分的に参照している。その際には、文中で2回目のインタビューにおける語りであることを明示的に記載している。

表 調査協力者概要（1回目のインタビュー時点）

仮名	年齢	出生時性別付与	性自認/ ジェンダー・アイデンティティ	性的指向/ セクシュアリティ ³
U	20代	女性	「中性」、「Xジェンダー」	「男の人が好きなんじゃないかな」
D	10代	女性	「Xジェンダー」	「10人いたら7人ぐらい女性」
I	20代	男性	「[[男女] どちらの感覚もありそう]」、「Xジェンダー」	「どちらかと言えば女性」
T	20代	男性	「女性」、「Xジェンダー」、「ジェンダークィア」	「パンセクシュアル」

インタビュー場所は大学構内の貸会議室やカフェ、ファミリーレストランなど、その都度調査対象者と相談しながら決め、1回1～2時間程度かけて話を伺った。

調査にあたっては、メールで事前に調査依頼書と参加同意書／同意撤回書を送付し、調査の概要について説明した。またインタビュー当日は口頭でも依頼書の内容を説明し、インタビューはいつでも中断できること、中断や辞退によって不利益を被ることはないこと、インタビューデータは個人が特定されないよう十分に匿名化した上で使用することなどを説明し、同意書に署名をもらった上でインタビューを行った。また本稿の執筆にあたっては、原稿内で引用している語り

る性別違和の「発現」に着目することで、ジェンダー、セクシュアリティ、身体が結びついていく個別具体的な過程とそのつながりの様相をより詳細かつ具体的に描き出すことを試みる。

³ ここでは関連すると思われる当人の発言の一部をそのまま表にまとめている。

やその解釈に問題がないかを事前に確認してもらい、了承を得た上で使用している。

3 分析

本稿の分析対象となる4名は、出生時に割り当てられた性別に対する違和を感じ始めたきっかけの一つに恋愛や性愛に関わる事柄を挙げている人たちである。まずUさんの事例から、他者からのまなごしを通して、ある人が「性的な存在」として立ち現れる過程や要因を考察する(3-1)。次にDさんの事例から、他者を性的な存在としてまなごすことによって、自己の中に新たな性的主体が立ち上がっていく様子を考察する(3-2)。そして、性的にまなごす／まなごされることが自己や他者を性的な存在にしてしまうものだとすれば、他者を性的に「まなごさない」ことが、性的な存在であることとどのような関係にあるのかをIさんの事例から考察する(3-3)。さらに、恋愛／性愛が性的な存在である者同士によって成立する関係だとすると、望みの性としてまなごされる／まなごされないことが親密な関係を構築する上でどのような意味をもつのかをTさんの事例から明らかにする(3-4)。

ここで「性的」に「まなごす／まなごされる」とは、単に性的欲望のある人に向ける／向けられるということに留まらない意味が込められている。第一に、ここでの「性的なまなごし」とは、性的欲望や恋愛感情に関わるさまざまな「惹かれ」を自己／他者に対して有し、それによって自己／他者にさまざまな形で働きかけることを指す⁴。しかし第二に、そうした「性的なまなごし」は、自己／他者に特定のジェンダーを付与した上で、そのようなジェンダー化された自己／他者に性的欲望や恋愛感情を向ける／向けられるということでもある。このように「性的なまなごし」とは、性的欲望や恋愛感情を自己／他者に対して向ける／向けられることと、それに伴って自己／他者をジェンダー化しようとするのが複雑に絡まり合うことをもたらすものである。こうしたセクシュアリティやジェン

⁴ 「恋愛的惹かれ」と「性的惹かれ」を区別することは、アセクシュアル・コミュニティにおいて重要である(池田2019)。ただし4名の事例では、両者は明確に分けられない形で登場している。そのことから本稿では性別違和が現れる場面として「恋愛／性愛」という本来は区別される必要のある領域をあえて併記して用い、区別されるべき時には片方のみを用いた。

ダーをめぐる相互作用を通じて現れる自己や他者のことを、本稿では「性的な存在」と呼んでいる。

3-1 「そういう目で見てくる」——Uさんの語り

FiX⁵のUさんは20代の会社員で、Xジェンダーとして自認したのは1年ほど前だという。セクシュアリティについて尋ねると、「もともと恋愛に興味がない。ほぼない、くらい」といい、これまでに「好きになった人」が「男の人」だったため、「男の人が好きなんじゃないかな」と話していた。インタビュー後半では、「あんまり性別は関係なく好きになって気はしています」とも話しており、Uさんの性的指向ははっきりと自覚されているようなものではない。

Uさんが性別違和を感じるようになったのは大学進学後である。中学・高校と友人は男性が多く、彼らから「同性のように扱われてきた」ため「自分の性別を意識することもな」かった。大学進学のために上京し新しい環境での生活が始まるものの、「女の子らしい格好とかに嫌悪感、自分ができないな」と思い、自分と周囲の女子学生との間に差を感じ始めたという。以下はそれに続く会話である。

筆者：じゃあ本格的に性別違和を感じるようになったのは大学に入ってから？

U：うん。大学入ってからですね。まあでもあと一番その、一番しんどいなと思ったのが、男の人から女扱いをされるようになったっていうのが一番しんどくて。なんかこう、うん。要はそういう目で見てくるわけじゃないですか。それがすごい不快で不快でしょうがないっていう。その、本当に女の子として扱われるのがもう嫌で嫌で嫌でしょうがないっていうのが、きっかけですかね。

大学に入って、Uさんが「一番しんどいなと思った」こととして挙げているのが、「男の人から女扱いをされるようになった」ことである。「要はそういう目で

⁵ Female to X-jendāの略。出生時に割り当てられた性別が「女性」であるXジェンダーのことを指して使われる。

見てくる」という言葉が続くように、そこには性的な目で見られることが含意されている。Uさんの性別違和に関する語りの中では、性的な対象としてまなざされることと、女性として接されることが強く結びついた形で現れる。つまりUさんにとって「そういう目で見てくる」ことは同時に「女の子として扱われる」ことも意味しているのである。それはUさんの性別違和を引き起こした「決定的」な出来事として語られる「好きな人」との「関係」においてもよく表れている。

U：あとまあ、決定的だったのは、好きな人とこう、好きな人と付き合うまではいかなかったんですけど、恋人未満くらいの関係になってしまったんですよ。で、その時に、「あー、これまじ無理だろ。わたしやっていけない」ってちょっと思ったのが。

筆者：その方のことは好きなんだけどってことですよ？

U：いやすごい好きですけど、全然好きなんですけど、ただなんかこう、あーと思って。やっぱ、本当にそういう女性としてみられることに対してなんかすごい、それが一番爆発したって感じですね。あ、無理無理と思って。

「好きな人」と「恋人未満くらいの関係」になった際に、Uさんは「まじ無理」「わたしやっていけない」と感じてしまう。相手に好意をもっている「けど」、相手から好意を向けられることは同時に「女性としてみられる」ことを意味してしまうため、強い嫌悪感が生じてしまう。

好きな相手との関係構築を望みつつ、それを拒否する（せざるを得ない）というアンビバレントな感情について、Uさんは自分のことを「すげー我儘だなと思う」と話している。またこの後の箇所でも「相手に対して申し訳なさしかない」とし、こうした感情によって相手を振り回してしまうことに後ろめたさを感じている。また、「別にキスしたりそういうのって嫌じゃない」、「生理的に嫌じゃなかったらやれる」とし、こうした感情は身体的な接触それ自体に向けられた嫌悪ではないことが説明される。しかし、「好きな人」との性行為については以下のように語っている。

筆者：でも別に、恋愛対象として好きな人が生理的に無理なわけではないん

ですよ？

U：無理なわけではない、けど、何だろうな。なんか、やってしまった次の日とか、うわー、死にてーって思うっていう。

筆者：そうなんですね。

U：そう。なんか、自分が、すごい世の中の女、女になってしまうじゃないですか、なんか立場的には。それがすごく、耐えられないっていう。絶対無理とか、本当に。

「好きな人」との性行為の翌日に、Uさんは強い自己嫌悪に苛まれてしまう。なぜなら「立場的に」、「世の中の女」になってしまうからである。ここでは第三者的な視点が出てきており、自己と他者との関係や相互行為が異性愛的な枠組みで理解できてしまうがゆえに、自身が否応なく「女」という「立場」に置かれてしまうとUさんはみなし、それを強く拒絶しているのである。

さまざまな視点が重なり合って生み出される「女である」ことに対する違和感、Uさんの恋愛／性愛に関する認識にも影響を与えている。「何でもないものとして見てもら」えれば良いというのが、それはそんなに簡単なことではない。今後付き合う人は、Xジェンダーであることを理解してくれる人でなければ難しいかという筆者の問いかけに対し、Uさんは以下のように回答する。

U：んー！うん。やーやっぱそうですね。[…]友だちみたいな感じで、付き合えたら一番楽だろうなと思うけど、それ友だち以上、ん？友だちと何が違うんだ？とかって思って。もともと男の子友だちすごく多くて、別に雑魚寝とかもよくするから。じゃあ、ね。それ以上の関係になるかならないかの話かなと思うけどそれもそれでちょっと違うんじゃないかと思って。だから今すごい付き合うって何、何ぞ？っていう感じです。いやでも、なんか本当に、だからすごく、「じゃあ、彼氏になりたい」とか「付き合って」って言われると、すごい嫌になっちゃうんですよ。なんかもうその瞬間、はーと思って、嫌だと思って、相手に対して申し訳なさしかない（笑）

ここでは友だちと恋人を区別することの難しさが語られている。「友だちみた

いな感じで付き合えたら一番楽」だが、それは「友だちと何が違うんだ？」という疑問に繋がっていく。そして「それ以上の関係」(=性行為を伴う関係)になるかどうかの違いをおくのも「ちょっと違くないか」と感じ、こうした疑問の連鎖は、「付き合うって何ぞ？」という、恋人同士になるとはどういうことなのかという疑問を生み出している。その後には「いやでも」「だからすごく」など少し混乱した様子で、はっきりとした原因は自分でも分からないが、交際を申し込まれた瞬間に否応なく嫌悪感が発生してしまうこと、そしてそれに対して「申し訳なさ」があることが語られている。

Uさんのこのような性別違和の経験は、「女である」ことや、「女として存在する／させられる」ことが、自己と他者のさまざまな視点をとおして成立していることを示している。そこではジェンダー化された社会に生きるUさんの視点もまた、Uさんが「女として存在させられる」ことを成立させる機制の一部となっているように思われる。つまりUさんの語りは、恋愛／性愛という現象において、特別な他者から向けられる愛情や性的な欲望が、Uさんに特定の身体イメージを付与し、自己をジェンダー化された存在として、いわば「性的な存在」として立ち上がらせてしまうことを表しているのである。

3-2 「男の振る舞いがしなくなった」—— Dさんの語り

恋愛／性愛を通じて性的主体が立ち上がってくる仕方には、相手のまなざしだけでなく、自分が相手をどのような「性的な存在」——恋愛／性愛にまつわる欲望や感情と結びつきながらジェンダー化される存在——としてまなざすかという点も関係している。なぜなら、他者をまなざすことを通じて、自分自身も新たに性的主体となるからである。FtXのDさんの事例からは、「女性」を性的にまなざすことを通じて、——「女性」ではなく——「Xジェンダー」としての性自認が現れ、それが行為と結びつきながら自己の身体のあり様を変えていく様子が描かれる。

Dさんは10代の学生である。女性的な服装に対する嫌悪や身体違和があるが、社会的に「女性」とみなされることに違和感はないという。Dさんにセクシュアリティについて尋ねると、「うーん、どうなんですかね」と少し悩んだ様子で、「一応今、は女の人のパートナーがいる」と答えている。好きになるのは女性の

方が多いといい、「10人いたら7人ぐらい女性」の割合で、男性に「興味をもたないわけではない」とも話していた。Xジェンダーとして自認したのは1年半ほど前で、大学のサークルでこの言葉を知ったという。DさんにXジェンダーとして自認したきっかけについて尋ねると、「今思い返すと」と、Xジェンダーとして自認した現在から過去を振り返り、幼稚園のころから女性の服装を嫌がっていたことや、男の子とばかり遊んでいた経験が語られる。中学校に入ると、そうした自分が「なんか周りと違うなって思い始めた」といい、当時の意識と重ね合わせられるように性別違和の経験が語られるようになる。高校生になると「あなんか本当に違うんだって確信した」と、周囲と自分との間に明確なズレを感じるようになったという。以下はそれに続く会話である。

筆者：でもそのときは特に、言葉とかも分からないし

D：んーもともとバイだと思ってました。高校生のときに、どっちとも付き合ったんですよ。男の人と女の人と付き合って、あ、どっちも全然いけるわってなって。「バイセクシュアル」っていう言葉は知ってたので。最初はまあレズビアンかと思ったんですけど、男の人も好きになれるなーと思って。バイセクシュアルだなんてずっと、高校、3年間ぐらいずーっといて。で、女の子とその付き合ったときに、男の振る舞いをしたくなった⁶んですよ。それはなんか違う。バイセクシャルなのかなー？ってなって。

大学に入って「Xジェンダー」という言葉を知る以前のDさんは、自身をレズビアンやバイセクシュアルとして認識していた。小学校や中学校では「全然、男の子好きになれなかった」といい、恋愛感情が女性にのみ向いていたため「最初はまあレズビアンかと思った」という。そして高校に進学し、そこで男性の恋人ができたことから、その認識はバイセクシュアルに変わる。しかし、女性と付き合い合った際に「男の振る舞いをしたくなった」ことをきっかけに、バイセクシュアルとは「なんか違う」と感じ、バイセクシュアルという認識に疑問を持ち始め

⁶ 2回目のインタビューでこの出来事を振り返っていたときには、「男」というよりも「頼りたいみたいなの、かっこいい、と言われたみたいなの、そんなイメージ」と説明している。

る。相手の性別に応じて特定の振る舞いをしたいという欲求は、レズビアンやバイセクシュアルといった性的指向に基づく組み合わせだけでは説明できないと感じたのである。こうして、周囲の人たちとは「違う」という感覚の理由は当初性的指向によるものだと考えられていたが、その意識は性自認へと向けられるようになる。そこから、「性同一性障害」や「トランスジェンダー」などの概念を参照しながら自身の性について考えていく中で、大学のサークルで「Xジェンダー」という性のあり方に出会い、自認するに至ったという。

Xジェンダーとして自認したのと同じ頃、Dさんはネット上の掲示板で知り合った女性と仲良くなり、付き合うようになる。相手は当初バイセクシュアルとして自認していたが、「バイって言われると、[Dさん自身が] 男女でくられる」と感じたためそれを伝え、パンセクシュアルに認識を改めてもらったという。そのことをDさんは「セクの強要をしました」と笑いながら話していた。しかし交際が始まりしばらく経った頃から、その相手との性行為の際にDさんは強い身体違和を感じるようになり、性的な関係をもつことが難しくなってしまう。以降は2回目のインタビューにおける語りである。

D：なんか自分とその身体のズレがあるから、楽しくないんですね。[…]
 なんかずーっと付き合っていると、[…] やっぱりその、愛を確かめ合うみたいな意味が強くなってくると、[…] そうなってくると、なんか自分、はこんなことをしたいわけじゃないみたいな。こうやって喜ばせてあげたいわけじゃないみたいな、認識のズレが本当に激しくなっちゃって。X年目ぐらいから、なんか、もういいかもってなっちゃったんですね。そういう夜の関係を持つのが。…だし、なんか毎回虚しくなっちゃうし。なんか、うん。納得できないなーみたいな、虚しさをずっと抱えて、あの回数を重ねていってしまったので。

Dさんは「自分とその身体とのズレ」があるため、パートナーとの性行為を「楽しむ」ことができない。この「ズレ」について別の箇所では、「自分がしたいこと、は、女性の身体であるものではないなっていうのをすごく思っていて」と話している。それについて筆者がまた別の箇所で、そこでは男性的な身体がイ

メージされているのかと尋ねると、「いや、なんか、単純に男性器が欲しいんですよ。そういう行為においては」と答えている。Dさんにとって「男性器」は必ずしも男性的な身体を意味するものではない。Dさんはあくまで「男性器」を使った性行為をしたいと考えているのであり、それは男性として性行為を行いたいということではなく、Dさんがしたい行為において必要なものとして説明されている。しかし自分の身体には「男性器」がなく、そうした行為ができないため、自分の欲望と現実の行為、またそこにおいてイメージされる身体と自身の身体との間に「ズレ」を感じているのである。その「ズレ」の感覚は性行為の回数を経るごとにどんどん強くなっていった。

性愛におけるDさんの身体違和の経験は、このように常に行為との関係のもとで語られる。Dさんはその際の感情を「納得できない」や「虚しさ」と表現している。また別の箇所では「物足りない」、「もどかしい」とも表現していた。そうして、あるときからパートナーと性行為を行うことを止める。自分の身体では本当にしたい行為ができないために生まれるこうした感情は、相手の「想い」に「応えられてあげてな」という「苦し」さや性行為をすることに対する「プレッシャー」にも繋がっていた。

まなざす行為と結びつきながら変化するDさんの身体イメージは、個別に完結したものとして存在するのではない。それはむしろ、パートナーに対して行いたい振る舞いができない「もどかしさ」からも分かる通り、ある種の葛藤をも生み出している。つまりDさんの困難として立ち現れている身体イメージは、パートナーも含めた2人の相互行為——とりわけ性行為——によってはじめて生み出されたイメージなのである。パートナーとの関係がなければDさんの「男性器が欲しい」という欲求やそれによる身体違和もなかったかもしれない。ここにおいて、身体は常に一貫した不変のものとして存在するのではない。それは他者との関係の中で、その意味付けや感じられ方、輪郭が変わっていくものである。

3-3 「恋愛感情もあんまり分かんない」——Iさんの語り

UさんとDさんの性別違和の経験からは、まなざし／まなざされることを通じて、人が性的な存在になる様子が示されていた。恋愛／性愛に基づく親密な関係性が、人が性的な存在であることによって成立する関係だとすれば、他者を「ま

なごさない」ことが、性的主体であることといかなる関係にあるのかを考えることも必要である。MtX⁷のIさんの事例からは、恋愛的／性的惹かれを経験しないことが、周囲の男性と自分との間に「ズレ」の感覚を生じさせていく様子が示される。

Iさんは20代の学生で、大学で運動部に所属している。幼少期から何となく女性的な服装に対する憧れがあり、「[男女] どちらの感覚もありそう」と思っていたという。女性的な服装に対する憧れは今でも変わらないが、一方で男性的な服装に対する嫌悪感があるわけではないため、中学・高校は性自認が揺らぐことはなかった。Xジェンダーとして自認したのは2年ほど前で、インターネットで「男でも女でもない」というキーワードを検索していた際、Xジェンダーという性のあり方に会ったという。そうしたワードで検索したきっかけを、Iさんは以下のように語っている。

I: 検索してたきっかけは、うーんと、まあ、端的に言うと、なんか、まあ、自分の自認が、男かと言いつつ切れないなあと思うところがあって、調べたんですけど。多分なんか、いろいろあるんですけど、多分、友だちとかといると、なんとなくこう、感覚が違うんですね。うーんと、なんつったらいいんだろう。恋愛とか、うーん、女性に対する、なんだろう、[...] こう一緒に、なんだろう合宿とか、いろいろしてると、たまになんか、そういう、話 [= 異性愛男性向けアダルトコンテンツに関する話] になって。サイトの名前とか女優の名前とか出るんですけど、全く見ないので分かんないですよ。だから、それ、は、なんだろうそういうそうじゃない人はあんまり分かんない、なんつったらいいんだろう。自分の周りに見てなさそうな人がいない? というか。なんか大多数の人が見てるのかなっていうのを、思って。うん。っていうのは、あります。いろいろあります。順番に(笑) 順番に話しますけど。多分、ここ最近で起こった出来事で何かって言われたら多分一番はそれ。だから、ズレてるなっていうか。

⁷ Male to X-jendā の略。出生時に割り当てられた性別が「男性」であるXジェンダーのことを指して使われる。

「男でも女でもない」というワードで検索していた理由を、「自分の自認が、男かと言いつれいなあとと思うところがある」ったからだというのが、そうした認識は、友人たちとの比較の中で出てきている。「恋愛」や「女性」というものに対して、周囲の男友だちとは「感覚が違う」と感じており、そうした感覚が生じた場面の一つとして挙げられているのが、運動部の合宿である。「そういう話」(=異性愛男性向けアダルトコンテンツに関する話)が出てきたが、Iさんはそれらを見ないので話についていくことができない。さらに、そうしたコンテンツに関心をもたない人が自分以外に存在しないように感じられたため、周囲と自分との間に「ズレ」を感じている。

では、Iさんは「恋愛」や「女性」に対してどのような感覚をもっているのか。以下は筆者がセクシュアリティについて尋ねた場面である。

筆者：セクシュアリティについてお伺いしてもいいですか？

[…]

I：うーん、男性が好きではない。でも、うーんそう、恋愛感情もあんまり分かんない。でも、どちらかと言えば女性。

筆者：今まで何かお付き合いの経験っていうのは

I：は、1回して、1回だけあるんですけど。

筆者：それは女性の方で

I：で。なんか、すごい、アプローチだったので。うーん、なんかだから、好きかどうかよく分かんないけど、「じゃあお願いします」ってなって。でもなんか、うーん、なんて言ったらいいのかな…、なんか向こうが、求めてくる、愛情というか、彼氏らしさとかそういうものに、明確に言われたわけじゃないんですけど、なんか応えられないなと思って。何回か、出掛けて、全然楽しかったんですけど、友だちとそんなに区別、感覚がそんな区別ないので。で、なんか「ごめんなさい」って言って。

「男性が好きではない」ことは明確であるが、しかし「どちらかと言えば女性」というぐらいIさんの性的指向は曖昧なものであり、そもそも「恋愛感情もあまり分らない」という。過去に女性と交際した経験が語られるが、それも相手か

らの一方的なアプローチから始まったものであり、相手のことが「好きかどうかよく分かんない」が、相手の熱意に押されて付き合うことになる。しかし、相手がIさんに要求する「愛情」や「彼氏らしさ」などにIさんは「応えられない」と感じる。また、Iさんにとって恋人と友人とは「感覚がそんなに区別ない」ため、これ以上恋人関係でいる意味を見出せず、Iさんのほうから別れを告げたという。

さらにこの後の会話では、高校時代に女性に告白した経験が語られる。しかしIさんにとっては「人間として好きなのと、そこらへんの区別が」なく、「友だちとして気に入ったからなのかもしれない」としつつ、それらを恋愛感情として位置づけられるかは本人にも「分からない」という。また、そうした行動の理由として、当時は自分を「男だと思っていた」からだとしている。すなわち、自身を「男」だと思っていた頃は、他者に対して恋愛感情や性的欲求を周囲と同じようには抱かないということを自覚するのが難しくなっていたとも言える。以下で語られるように、「男」という自認から離れることによって、すなわちXジェンダーとして自認することによって、自身のセクシュアリティについて考えられるようになっているのである。以下は2回目のインタビュー時に、Iさんに現在のパートナーの有無を尋ねた場面である。

筆者：Iさんは、今お付き合いされてる人とか、いらっしゃいますか？

I：えーっと、その話、はなんかいろいろ多分喋れることはある気は、する。今はいないですけど。えーっと、Xジェンダー、を、自覚した後に、なんか、えーっと、あ、なんかその話は多分、前のインタビューでしたかもしれないけどとりあえず、えーっと、恋愛感情がないのかなと思っていて自分には。「アセクシュアル」って呼ばれたりもするんですけど。

1回目のインタビューでは、先に語られていたようにIさんの性的指向は、「どちらかと言えば女性」というほど曖昧なものであり、恋愛感情は「分からない」と答えていたが、それから4年ほど経った2回目のインタビューでは、恋愛感情は「ないのかな」という言い方に変わっている。「Xジェンダーを自覚した後」に、Iさんは自身が恋愛的／性的惹かれを経験しないことに対して自覚的になり、

その結果アセクシュアルとして自認するようになったのである。

他者を恋愛的／性的にまなざさないことで発生した男性自認の揺らぎは、言い換えれば、女性と異性愛的な関係をもったり、女性に性的欲望を抱いたりすることがIさんにとって「男」であることの大きな構成要素となっていたことを意味している。それゆえに、「男」ではなくなること——「Xジェンダー」として自認すること——が、自身のセクシュアリティに対する新しい認識をもたらしているのである。

3-4 「身体が受け付けない」——Tさんの語り

これまでの事例が示唆しているのは、恋愛／性愛という現象は自己と特別な他者を、そのまなざしを通じてジェンダー化し、それによって両者を性的な存在として位置づけるものであるということである。それゆえに、恋愛的／性的惹かれを経験しないことは逆に自己の性自認を曖昧にする契機を内在させていた。このことは一方で、恋愛／性愛において他者と親密な関係を構築しようとする際には、自己がその特別な他者をどのような性的な存在とみなし、また相手が自分をどのような性的な存在とみなすかが、とりわけ重要な事項であることを示している。

さらにいえば、こうした相互の惹かれやその不在は身体ジェンダー化とも不可分である。なぜなら性愛の場面では自己と他者の身体は、自分のものでありながら同時に他者のものでもあるようなものとして現れるからである。MtXのTさんの事例からは、パートナーの性的なまなざしが自己の身体やジェンダーを顕在化させ、それによって身体違和および性別違和が生じていく経験のみていく。こうした経験は、他者との親密な関係の構築の仕方に変化をもたらしていた。さらにこの変化を経て、自分を自分が望むジェンダーとしてみてくれるパートナーの存在が再び身体の可能性を開いていく。

Tさんは20代の学生である。インタビューの半年ほど前に以下で語られるような性別違和を経験し、現在は女性あるいはXジェンダーで、パンセクシュアルとして自認している。インタビュー前半では、「週及的なところがあって」と前置きした上で、Xジェンダーとして自認した現在から過去を振り返るように、母との関係や不登校の経験、環境の変化によるストレスで起こったパニック障害や鬱

病といった性別違和に至るまでの人生のさまざまな出来事が時系列で語られていく。そうした流れの中で「だんだん僕のカミングアウトの話と近づいてくる」として、半年ほど前に発生したという性別違和のきっかけとなる出来事が語られる。

その出来事とは、初めてできた恋人との「性的交渉の場面」である。性別違和を認識する以前のTさんは「付き合いたいなあとか、この人がいいなと思ったのは基本男性」だったが、「かといって女性に別に魅力を感じないわけではなかった」ため、バイセクシュアルの男性として自認していた。初めての恋人はTwitter上の「オフ会」で仲良くなった「シスジェンダーの女性」だった。以下はそれに続く会話である。

T：で、ただその、お付き合いをしていく過程の中で、その、なんて言うのかな。やっぱり、相手は普通のシスジェンダーの女性なので、やっぱり僕に対して男性的な態度を求めてくる。特にこう性的交渉の場面で、そういうふうな振る舞いが自然と求められてきたときにとっても、[...] 本当に、その初めてホテルに行って、そういう関係になったとき、本当に僕、駄目、駄目で。あの一本当そのあと1人になったときずっと戻し、嘔吐しちゃうほど、身体 [からだ] が受け付けない。だから、そこで初めて、いわゆる、身体違和、ディスフォリアが出て。

交際当初から、相手はTさんに「男性的な態度⁸を求めて」きており、その理由をTさんは、相手が「普通のシスジェンダーの女性」だったからだとしている。そうした異性愛的な関係の中で感じられていた曖昧な違和感は、その相手と初めて性的交渉をもとうとした際に、吐き気を伴う強烈な嫌悪感に変わった。その原因となっているのが、相手から「自然と」求められる「そういう振る舞い」、すなわち男性ジェンダーと規範的に結びつけられた行為を、当たり前のように要求されたことである。しかしそうした要求をTさんの身体は「受け付けなかった」。

⁸ これを別の箇所では「自分が能動的であることを一義、とするような行為」と説明している。

Tさんのこのような身体違和の発現は、相手から求められる「態度」や「振る舞い」といった役割行為と密接に関係している。相手との関係の中で違和感を抱えながらも、それまである程度維持されていたTさんの身体の統一性は、「性的交渉の場面」で男性として振舞おうとしたときに失われている。なぜなら、そのように振る舞うことを文字通り「身体が受け付けられない」からである。そしてそれはTさんの性自認や身体を感じられ方に強烈な変化を引き起こす。Tさんを男性としてみなす相手のまなざしやその触れ方、そしてそれらが要請する男性的な行為の企図を通じて、Tさんがそれまでもっていた自己の身体イメージに、相手のもつ身体イメージが入り込んでいく。しかしそこで描き出される身体イメージをTさんは受け入れることができない。それゆえに、身体違和が発生しているのである。

性的交渉の場面における身体違和の経験は、以下で語られるように、性愛においてTさんが求める他者との関係にも変化をもたらす。

T：あ、でそこで初めて、あ、自分は、いわゆるその、とりあえず女性になりたいか云々は別として、あの、まあ確かに子どもの頃からそういう格好したいとかっていうのもあったんですけど、とりあえず男性、であることで、男性として、いわゆるシスジェンダーの男性としてとりあえず、誰かとお付き合いをすることは無理なんだなってということが分かって。

男性的な行為を求められることによって発生した身体違和によって、Tさんは「シスジェンダーの男性として」、今後他者と性愛関係をもつことは不可能だという認識に至る。その後Tさんは、自分の意志やセクシュアリティを「相手に伝える目的」で「異性装」を始める。結局それによってパートナーとは別れることになってしまうが、Tさんのこうした服装による視覚的な実践は、他者がもつ自己の身体イメージを主体的に変更し、それを通じてコミュニケーションのあり方を変更することを相手に要請するものである。

こうした認識の変化とそれに伴う実践は、その後の性愛関係にも変化をもたらしている。その際、過去のパートナーとは対照的な存在として語られるのが現在のパートナーの存在である。相手はパンセクシュアルの女性で、「洋服もいろいろ

る貸してくれたり」するなど、Tさんのことを「女の子として見てくれてる」といい、そうした二人の関係をTさんは「レズビアン関係」と説明する。そしてそれは以下で語られるように、Tさんの服装にも変化をもたらしている。

T：だから今なんかは結構その今のパートナーになってから、どっちかっていうとその、まあ僕の女の子の部分をよく見てくれてるので。僕も今ファッションをいろいろ考えるようになって（笑）結構テンプレ的に女装だからスカートっていう感じだったんですけど、なんか自分の中でもうちょっと変えようかなって彼女と話してて。その、あの、レディースに見えるけれども例えばパンツルックとか、昨日とかパンツルックしてたんですけど。そういうのとかもあり、今日の服装もなるべくちょっと中性、寄りっていうか、なんか、いわゆる女の子の子してるファッションじゃないものの方が自分はいいのかなあとか。

「シスジェンダーの男性」ではないことを「相手に伝える目的」で始まったTさんの服装実践は、現在のパートナーとの出会いを通じて、Tさんがより自分らしい身体を生きるための実践に変わっている。それまでは「テンプレ的に女装」としてスカートなど、「女の子の子してるファッション」をすることが多かったが、「パンツルック」や「中性寄り」な服装など、より幅広い服装を楽しめるようになっていく。それは、現在のパートナーがTさんの望むようにTさんの性を見てくれる、すなわちTさんに対して女性の身体イメージを有しているからであり、だからこそ、パートナー関係においては「女性でありたい」というTさんが性同一性をもって自己の身体を生きることが可能になっているのである。

4 考察

ここまで、恋愛／性愛に関する場面で性別違和を経験した4名のXジェンダーの語りを分析してきた。本節では、本稿の目的と照らしながら4名の分析を整理し、本稿の意義と今後の課題を述べる。本稿の目的は、ジェンダー、セクシュアリティ、身体の構造的な連関とその多様な結びつきを非二元的な性を生きるXジェンダーの恋愛／性愛における性別違和の語りから経験的に析出していくこと

であった。

事例から明らかとなったのは次の二点である。

第一に、恋愛／性愛がもたらす性的指向と性自認の不可分な結びつきである。3-1および3-2のUさんとDさんの事例は、恋愛／性愛という現象がまなざし／まなざされることを通じて人を「性的な存在」にすることを示唆していた。性的「指向」という概念が示している通り、しばしば恋愛／性愛に関わる事柄を条件づけるのはその方向づけ（Orientation）であり、それは指向する自身のジェンダーや指向される他者のジェンダーをその都度特定しようとするものでもあるといえる（千葉, 2020）。それゆえに、3-3のIさんの事例では他者を性的に「まなざさない」ことが、自己のジェンダーを不明確にする契機を孕んでいた。以上のように、恋愛／性愛という現象が、まなざし／まなざされることを通じてジェンダー化された主体となることで成立する磁場であるからこそ、お互いのジェンダーの認識が一致していることは親密な関係を構築する上でとりわけ重要な要素になっている。3-4のTさんの事例では、相手が自分に望まない性役割を求めてきたり、逆に望みの性として接してくれることが、Tさんの身体や性の感覚に変化をもたらしていた。

第二に、まなざす／まなざされることを通じて人がジェンダー化された存在となることは、それに基づいて自己や他者に特定の身体イメージを付与する／されることでもある。特に恋愛／性愛において、それは重要な他者との間で行われ、自己と他者の身体イメージが重なり合ったり、その関係の中で新たな身体イメージが形成されていったりする。そしてそのイメージはときに行うことを通じてはっきりとした輪郭をもったものとして立ち現れてくることがある。男性的な行為を求められたことを通じて発生した3-4のTさんの身体違和は、男性的な行為を身体化できないこと、すなわち行為を通じて立ち現れてきた相手のもつ身体イメージを受け入れることができないことによって発生していた。また、性行為における「男性器」の使用欲求と結びついた3-2のDさんの身体イメージは、パートナーとの関係のなかで形成されたイメージであった。

以上のような経験的知見は、先行研究に対して2つの意義を有している。

まず本稿の知見は、Xジェンダーの性別違和の発現プロセスを明らかにすることで、性的指向と性自認の経験的な関与の仕方をより具体的に考察することの

重要性を指摘したCuthbert (2019) やBettcher (2014) らの研究結果を引き継ぎつつ、両者を同一構造上の問題に措定し直したものであると言える。Cuthbert (2019) によれば、アセクシュアルの人びとはしばしばジェンダーをセクシュアリティに関するものとして理解し性的な行為や性的魅力を拒否するがゆえに、ジェンダーそのものからの疎外感を感じているという。それゆえアセクシュアルの人びとの中には、A ジェンダー⁹と自認する人も多くいるとされる。本稿の事例においては、性的対象となることで性別違和が発生した3-1のUさんや他者に恋愛的／性的に惹かれないことによって性別違和が発生したIさんの事例にもCuthbert (2019) の研究結果との構造的な類似が見られる。またBettcher (2014) は、トランスジェンダーのセクシュアリティは性的指向のみに着目するのではなく、性的自己と性的他者の相互関係を踏まえたくて理解することの重要性を指摘する。3-2のDさんや、3-4のTさんの違和の経験でも、親密な関係において、自己と他者がどのような性的な存在としてどのように振舞うかがまさに問題になっている。

既存の研究では、一方では恋愛的／性的に他者に惹かれないことがもたらす性的指向と性自認の關係に (Cuthbert)、他方では他者に惹かれることでもたらされる相互關係に (Bettcher) それぞれ分析の着眼点が絞られており、両者がどのような構造的連関をもつものなのかが分からない状況にあった。それに対して本稿では、Xジェンダーの性別違和を「まなざし」という観点から分析することで、「惹かれること」と「惹かれないこと」の相互排他的ではない關係を描き出すと同時に、両者がシスノーマティブでセクシュアルノーマティブ¹⁰な社会構造のもとで、性的な主体やそれに基づく身体イメージの形成、強化あるいはその再編に別様に、しかし非異性愛的であるという点では「逸脱」として同様に作用していることを示した。

さらに、ここまで見てきた4名の事例における性自認や身体イメージの關係論的な構築性は、二元制に回収されないようなジェンダー、セクシュアリティ、身体の多様な結びつきをも示している。3-2のIさんは、Xジェンダーとして自認す

⁹ 特定のジェンダー・アイデンティティを持たない人を意味するアイデンティティ・カテゴリー。

¹⁰ 「セクシュアルノーマティヴィティ」概念の詳しい説明やこの概念が射程とする問題群については松浦 (2020) を参照。

ることで、「アセクシュアル」という自身のセクシュアリティに対する新しい認識を得ていた。また、3-3のDさんの「男性器」を伴う身体イメージは「男性」であることと結びついたものではない。それは、性愛関係を通じて新たに形成された性的主体——Xジェンダー——と結びついたものである。つまりこうした事例は、恋愛／性愛における性別違和の発現においてもしばしば二元的かつ一貫したものとしてみなされる（「男性器」を伴う身体イメージは「男性」自認に結び付く）等）傾向にあるジェンダー、セクシュアリティ、身体の結びつきは、実際には非一貫的かつ非二元的でもありうることを示しているのである。これはトランスジェンダー研究が着目してきた論点でもあるが（Salamon, 2019）、本稿はその具体的な実相を経験的に明らかにした。

5 おわりに

本稿では特定のセクシュアリティではなく、恋愛／性愛における性別違和の発現に着目することで、ジェンダー、セクシュアリティ、身体の意味形成プロセスと相互のつながりの具体的な様相を明らかにした。4名の性別違和の経験においては、この3つが相互に影響し合い、それぞれがはっきりとは分けられない形で経験されていた。

一方でこうした知見は、異性愛の枠組みのもとでまなざし／まなざされるという男女の非対称的な関係性や、性的欲望をもつ主体であることが男性に紐づけられるといった、社会における二元的なジェンダー規範とも関連している。本報告で扱った4名という少ない事例の中でも、生活環境や社会的文脈などにおけるこうした規範の働き方の違いが示唆されている。今後は、出自や階級、障害の有無などを踏まえたより詳細かつインターセクショナルな視点に基づく検討が求められる。

さらに、本稿で見てきた4名の恋愛／性愛の様態とは異なり、自己／他者をジェンダー化しないような恋愛／性愛実践（Aジェンダーの恋愛／性愛など）や、まなざし／まなざされる「性的な存在」のあり方がパートナー関係の中で絶えず切り替わっていくような実践もありうる。こうした恋愛／性愛の実践の多様性についてはさらなる経験的な研究が求められるだろう。これも今後の課題としたい。

Acknowledgments

調査にご協力くださった方々に心より感謝申し上げます。また、森山至貴氏からは拙稿の理解を広げるための貴重なご進言をいただきました。深くお礼申し上げます。

なお、本稿はJSPS科研費（特別研究員奨励費・課題番号22J21053）の助成による研究成果の一部です。

References

- Bettcher, T. M. (2014). When selves have sex: When the phenomenology of trans sexuality can teach about sexual orientation. *Journal of Homosexuality*, 61(5), 605-620.
- Butler, J. (2021). 『問題=物質となる身体——「セックス」の言説的境界について』(佐藤嘉幸, 竹村和子, 越智博美ほか, Trans.). 東京: 以文社. (Original work published 1993).
- Cuthbert, K. (2019). "When we talk about gender we talk about sex": (A)sexuality and (a) genderd subjectivities. *Gender and Society*, 33(6), 841-864.
- Dale, S.P.F. (2013). Mapping "X" —— The micropolitics of gender and identity in a Japanese context. Ph.D. thesis, Sophia University Department of Global Studies.
- Decker, J. S. (2019). 『見えない性的指向 アセクシュアルのすべて——誰にも性的魅力を感じない私たちについて』(上田勢子, Trans.). 東京: 明石書店. (Original work published 2014).
- Doorduyn, T., & Van Berlo, W., (2014). Trans people's experiences of sexuality in the Netherlands: A pilot study. *Journal of Homosexuality*, 61(5), 654-72.
- Rubin, G. (1997). 「性を考える—セクシュアリティの政治に関するラディカルな理論のための覚書」(河川和也, Trans.). In 『現代思想』25(6), 94-144. 東京: 青土社. (Original work published 1984).
- Salamon, G. (2019). 『身体を引き受ける——トランスジェンダーと物質性のレトリック』(藤高和輝訳, Trans.). 東京: 以文社. (Original work published 2010).
- Schilt, K., & Elroi, W. (2014). The sexual habitus of transgender men: Negotiating sexuality through gender. *Journal of Homosexuality*, 61(5), 732-748.
- Sedgwick, E. K. (2018). 『クローゼットの認識論——セクシュアリティの20世紀 新装版』(外岡尚美, Trans.). 東京: 青土社. (Original work published 1990).
- Valentine, D. (2007). *Imagining transgender: An ethnography of a category*. Durham: Duke University Press.
- 池田弘乃. (2019). 「ケーキがあるのになんでセックスなんかするの? ——『アセクシュアルと法』を考えるために」『クィアと法——性規範の解放/開放のために』東京: 日本評論社.
- 武内今日子. (2021). 「恋愛的/性的惹かれをめぐる語りにくさの多層性——「男」「女」を自認しない人々の語りを中心に」. 『現代思想』, 49(10), 39-49.
- 千葉雅也. (2019). 「カテゴリーの性愛と特異的性愛——対立しつつ共存する」『世界思想』, 46, 12-16.
- 松浦優. (2020). 「アセクシュアル研究におけるセクシュアルノーマティヴィティ (Sexualnormativity) 概念の理論的意義と日本社会への適用可能性」. 『西日本社会学会年報』, 18, 89-101.
- 藤高和輝. (2020). 「性別違和」とは何か——トランスジェンダー現象学の導入に向けて」. 『フェミニスト現象学入門——経験から「普通」を問い直す』京都: ナカニシヤ出版.

Abstract

**Relational Formations of “Sexualized-Gendered Subject”:
The Experiences of Gender Dysphoria in Romantic/Sexual Relationships**

Misato SAGAWA

The conceptualization of gender and sexuality and their relationship have been argued in feminism and queer studies. Empirical sociological research has also explored how gender works through sexuality, and sexuality works through gender, and how the two shape identities and relationships with others. In transgender studies, researchers have focused on the aspect of “embodiment” and showed the indivisible relationship between gender identity and sexual orientation. Based on the above point, this paper focuses on the manifestation of gender dysphoria in the romantic/sexual relationships of four people who identified as X-jendā, and seeks how gender, sexuality, and the body have been structurally interrelated. “X-jendā” is a term denoting or relating to a person who does not subscribe to conventional gender distinctions but identifies with neither, both, or a combination of male and female genders. It is a uniquely Japanese term that came into use at the end of the 1990s. In depicting these experiences, this paper focuses on the concept of “sexualized-gendered subject,” which refers to one person being gendered through the sexual “gaze” of the self and others in romantic/sexual relationships. The case analyses of the four X-jendā participants reveal how “gazing/being gazed at” and “not gazing” are related to being sexualized-gendered subjects. Their experiences of non-polarized or non-binary sexuality illustrate how the structural relation between gender, sexuality, and the body is entangled in various practices that are in contact with, but not contained by, the gender binary system.

Keywords:

X-jendā, transgender, sexuality, body image, gaze